障害児・者の同胞の成長過程における心理的変容に関する研究
ーポジティブな変容からの分析ー

近藤　綾音,*　堤　俊彦**

目的：本研究は、障害児者をもつ健常な兄弟姉妹（以下同胞）に対して、インタビュー調査を行い、これまでの人生を振り返り、現在に至る成長過程においてどのような心理的な変容を経てきたのか、また将来についてどのような展望があるかについてポジティブな変容に注目し、同胞特有の心理的変容を探索的に明らかにした。

方法：このプロセスを段階的に明らかにするために「幼少期（０～５歳）」「学齢期（６～12歳）」「思春期（13～18歳）」「青年期（９歳～現在）」「未来」の５段階に分類し発達的な側面から分析を行った。

結果：幼少期から思春期にかけて経験したネガティブ体験などによって同胞は、障害児者や周囲の人々に対し違和感、戸惑い、怒りなどの感情をもつものの思春期から青年期において障害児者への感謝などへと変化が見られた。

結論：また同胞や障害児者の発達に伴って家族が深まっていき、多くの同胞は「受容力」「共感力」「人間観」「（障害）対応スキル」「挑戦性」などの自己成長感を得ていることが明らかとなった。

キーワード：障害児・者の同胞，成長過程，自己成長感，レジリエンス，PTG（Post Traumatic Growth）

（2022年10月14日受付け、2022年12月20日受理）

はじめに

１．問題

兄弟姉妹は、両親以外の最も身近な他者として情緒的なやりとりなどを経験しながら基礎的な対人関係を築き、それが社会性の発達に影響を及ぼす。また兄弟姉妹の関係は、社会性の獲得に伴い人格形成にも影響を与える重要な要因の一つといえる。兄弟姉妹との関係は、長年に渡って変化しながら続いて行く。これらの関係は、障害児者の兄弟姉妹（以下同胞とする）でも同様とされ、これまで同胞については多く研究がなされている。これらの研究は、障害児者を兄弟姉妹に持つことのストレス、さらにどう障害を受容するかが多い。例えば同胞は、不適応行動や不適応症状の発生頻度が高いと報告されている（Breslau，1981[1]；広川，2001[2]；Tew，1973[3]）。同胞の成長過程の兆候として、立山ら（2003）[4] は両親が障害児のことで手一杯になること、人間関係から生じる葛藤などによる喘息や夜尿などの「身体症状」、不登校や反抗的態度などの「行動上の問題」などとして現れる。つまり、障害児者を兄弟姉妹にもつストレスは、感情をゆさぶられるなど、健全な心の発達を妨げる要因として捉えられている。同胞の成長過程で問題が生じる要因として、障害児者の要因は、「障害の種類」「程度」、同胞側の要因としては、「障害児との年齢差」「ストレスへの適応能力などの個人差」、養育者側の要因としては、「養育能力」「養育への支援体制」「障害受容」などが挙げられている[5]。

一方で障害受容という受身的な考えだけでなく、同胞の強みやレジリエンスなどのポジティブな側面を見る重要性も指摘されている。例えば平川[5] は、紆余曲折の経験は「偏見に敏感」「健康のありがたさ」「忍耐強く慈悲深い」を明らかにしている。また同胞自身の要因に「性別」「性格」、親要因として「障害受容」「きょうだいへの障害の説明」があるとする。Meyer（1994）[6] は同胞に見られる特有の経験や悩みの正負の影響を指摘する。例えば、同胞は障害児者との生活で苦痛はあ

＊大阪人間科学大学大学院　人間科学研究科
＊＊大阪人間科学大学　心理学部　心理学科
＊＊責任著者：大阪府摂津市正雀1-4-1、大阪人間科学大学　心理学部　心理学科
E-mail：t-tsutsumi@kun.ohs.ac.jp

るが「精神的な成熟」「洞察力の深まり」「忍耐力が付く」「感謝が持てる」を明らかにしている。

また川上[7]は、障害児と生活をともにする同胞の関係構築のプロセスを明らかにしている。同胞は「障害児が固有の世界を持っている」「障害児の世界の理解しづらさ」を認識し、「思いが繋がらない」「縮まらない距離」の実感や「障害児の行為に対する葛藤」を抱きながらも「障害児を思いやる」。また、「同胞のよい変化に対する肯定的受け止め」を行い、「切っても切れない存在」と捉え相互作用によって「つかず離れずの付き合い」を創り上げていくとしている。

これらの研究結果は、障害児者を兄弟姉妹に持つことは、ネガティブだとする画一的な捉え方の危険性を示唆するものである。同胞の成長過程に見られるポジティブな影響は、PTG(Post Traumatic Growth:トラウマ後の成長)の研究が参考になる。

２．同胞とPTG（Post Traumatic Growth：トラウマ後の成長）の関係

PTGとは自然災害や死別などの人生を揺るがすようなつらい出来事など、不適切な出来事や困難な経験との精神的なもがき・闘いの結果生ずる、ポジティブな心理的変容の体験のことと定義されている(八田ら, 2015[8] ;Tedeschi & Calhoun, 2004[9])。自然災害や死別と言わずとも同胞もきょうだいに障害があると知ることはショックな出来事であり、障害者基本法が施行され福祉・医療の進歩や心のバリアフリー化などが進んでいると言われている現在のわが国においても、障害を持った家族との生活は多少なりともストレスフルな経験をするのではないだろうか。PTGについて、Tedeschi & Calhoun（1996）[10] は困難な経験をせざるを得なかった人がそれをきっかけに、主に５つ領域における成長をしたことを明らかにした。５つの成長とは、「他者との関係」「新たな可能性」「人間としての強さ」「精神性的（スピリチュアルな）変容」「人生に対する感謝」である（八田ら, 2015）[8]。わが国においてもTaku, et al.（2007）[11] はストレスフルな状況は自己成長感にポジティブな影響を及ぼすことを示している。これらの研究は同胞が障害児の存在を認め兄弟姉妹として、ストレスフルな影響を乗り越えていく過程は、ネガティブな状況や状態を跳ね返す力（レジリエンス）を身につけるポジティブな影響を与える要因として捉えられる。

近藤[12] は障害児の同胞におけるポジティブな影響について、レジリエンスとPTGの関係を明らかにしている。同胞は新しいことや、多様なものに興味や関心があり、それらに挑戦することを厭わないなど、障害児者の予測不能な行動や考え方が、同胞にこれまでに無かった考えに対する感度を高めたり、それによって状況などに感情を合わせる力が強くなると考察している。また同胞は障害児との生活を通して自分や他人の大切さを学び、他人に配慮できる成長感があることを明らかにしている。しかし、レジリエンス尺度やPTGIは本来、障害児の家族を対象にした尺度ではなく、障害児の家族特有の成長感について正確に測定するには限界があると述べている。

このように、これまでの研究では、同胞の成長過程でどのような出来事によってポジティブな成長感が得られているのかについてはあまり明らかにされている研究がない。また、ポジティブな影響へと受け止めが変わっていく同胞の試行錯誤のプロセスについても検討されていない。三原（1993）[13] は、障害児の存在によって両親や兄弟姉妹の精神的成長がどのように行われたかなどについても調査することが重要であると述べている。

そこで本研究では、インタビュー調査を用いて障害児者の同胞は、障害児者の存在や生活によって同胞自身の成長過程において、どのようなポジティブな影響を受けているかを明らかにする。加えて同胞の自己成長感のプロセスを段階的に理解するために、同胞の成長の段階を「幼少期（0 ～ 5歳）」「学齢期（6 ～ 12歳）」「思春期（13 ～ 18歳）」「青年期（19歳～現在）」「未来」に分け、発達的な側面からの心理変化について探索的に分析していく。成長の段階を分けるにあたって同胞は、ある程度正確に記憶を想起でき自身のこれまでや、きょうだいとの関係を俯瞰出来る年齢であることなどが求められる。よって本研究では20代で、疾患がなくコミュニケーションの可能な健常者を対象とした。また本研究では、障害児者を兄弟姉妹に持つ健常者のことを「同胞」とし、同胞から見たときの障害児者のことを平仮名で「きょうだい」、一般的な意味合いでの兄と弟、姉と妹などの関係を指すときは「兄弟姉妹」とする。

方法

2019年６月から2019年９月の間、障害児者を兄弟姉妹に持つ20代の男女６名（男性２名、女性４名、平均21.33歳）の同胞に対し、インタビューガイドに沿って半構造化インタビュー調査を行った。調査時間は１人につき約１～ 1.5時間であった。また、対象者に対してインタビュー調査の開始前に自身や（障害児者を含む）兄弟姉妹の属性に関する質問紙調査を行った。加えてICレコーダーでの記録及びメモを取ることなどの承諾を得た。実施場所は、筆者の所属する大学及び同胞の所属している大学の教室において実施した。なお、対象者には事前に研究の意義、目的、調査方法、倫理的配慮、個人情報の取り扱い、調査中止の方法などについて筆者と確認した後、同意書を作成した。

本研究は、大阪人間科学大学倫理審査委員会において、審査、受理されたものである（院2019－3)。また

本論文に関して、開示する利益相反関連事項はない。

1. インタビューガイド

インタビュー内容は、「きょうだいに障害があることをいつどのように知ったか」「きょうだいとの出来事の中で印象に残っているもの」「きょうだいの存在が同胞や周囲との関係に及ぼした影響」「きょうだいは同胞をどのように成長させてくれたと思うか」の４項目を主とし語られるエピソードとそれらに伴う感情や考え方などについて聞き取りを行った。「きょうだいとの出来事の中で印象に残っているもの」については成長の段階ごとに聞いていった。

2. 分析方法

田中[14]の「KJ法クイックマニュアル（2013年版）」を参考にKJ法を用いて分類と概念抽出を行った。音声データから逐語録を作成し、意味上の文節に区切ってコード化を行った。全コードを前述した５つの発達段階に沿って内容でグルーピングし、カテゴリーを設定した。【 】はカテゴリー名、〈 〉は具体的な語りを表す。その後、同胞の成長過程における心理的変容について関連図の作成を行った。

結　果

1. 同胞及び障害児者の属性

同胞の属性及び障害児者の属性は表１に示した通りである。なお、対象者のきょうだいは全員が療育手帳か身体障害者手帳、またはその両方を有しており、障害の程度において療育手帳、身体障害者手帳等の等級に合わせて分類した。

表１　同胞と障害児者の属性と他の兄弟姉妹

同胞	同胞の性別（年齢）	障害児者の性別（年齢）	障害児者の障害（程度）	他の兄弟の有無
Aさん	女性（21）	男性（23）	知的障害・自閉症（中度）	なし
Bさん	女性（20）	男性（18）	知的障害・自閉症（中度）	健常1名
Cさん	女性（24）	男性（23）	知的障害（中度）	なし
Dさん	男性（22）	男性（18）	自閉症・学習障害（軽度）	健常3名
Eさん	女性（21）	女性（15）	知的障害・肢体不自由（重度）	健常1名
Fさん	男性（20）	男性（23）	自閉症（重度）	なし

同胞の属性及び障害児者の属性を示したものである。なお、対象者のきょうだい（障害児者）は全員が療育手帳か身体障害者手帳、またはその両方を有しており、障害の程度において療育手帳、身体障害者手帳等の等級に合わせて分類した

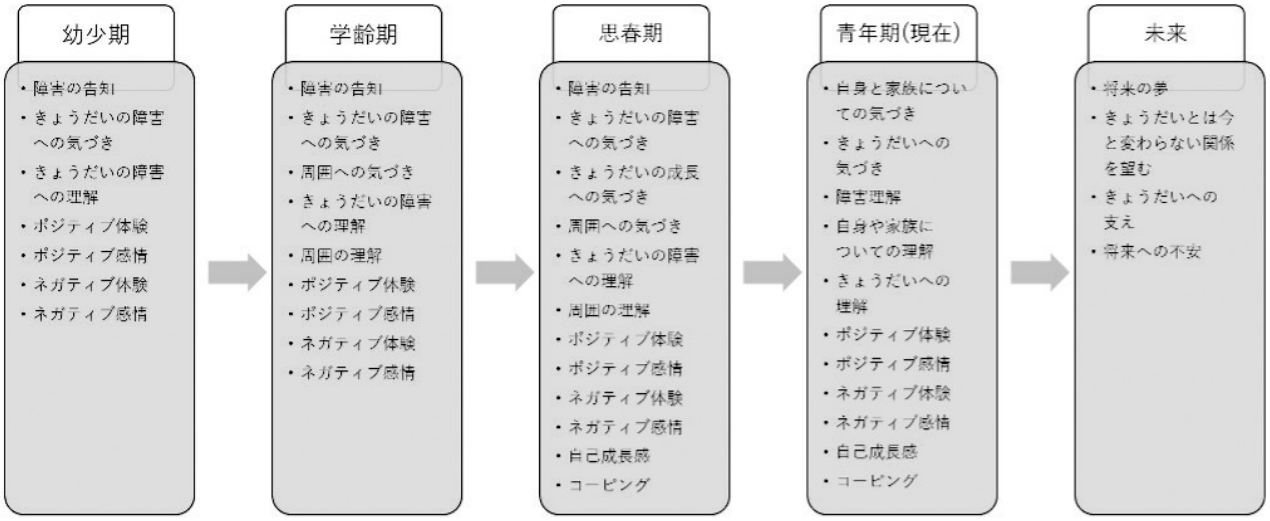

図１　発達段階別、抽出されたカテゴリー分類

同胞の発達段階別に抽出されたカテゴリーを示した。同胞の発達段階を「幼児期（0～5歳）」「学齢期（6～12歳）」「思春期（13～18歳）」「青年期（19～現在）」「将来」の５段階に分類し、各発達段階において起った出来事やそれらに伴う感情などが抽出された。

2. 発達段階ごとに抽出されたカテゴリー

同胞の発達段階を「幼児期（０～５歳）」「学齢期（６～12歳）」「思春期（13～18歳）」「青年期（19～現在）」「未来」の５段階に分類し、各発達段階において起った出来事やそれらに伴う感情などが抽出された。これらのカテゴリーは図１に示した通りである。

１）幼少期：両親から明確に【障害の告知】をされていない同胞が多く、周囲や両親の言動や行動などから【きょうだいの障害について気づき】、きょうだいに対する違和感を抱き始めるが、【きょうだいの障害への理解】は曖昧であり、それゆえ障害理解は、周囲の関わりや環境によって個人差があることがわかった。幼少期において同胞は、きょうだいの障害理解があいまいなまま、日常生活を共に過ごすことになる。きょうだいとの日々の生活により、同胞は様々な【ネガティブ体験】や【ポジティブ体験】をし、これに伴い【ネガティブ感情】【ポジティブ感情】を抱いていた。ポジティブ体験には、きょうだいの活動をきっかけとして仲間や支援者との出会いを挙げる同胞もいた。

２）学齢期：同胞は両親から【障害の告知】を受ける場合もあり、説明による障害理解は不十分ではあるが、幼少期よりも周囲との比較により【きょうだいの障害への気づき】を多く体感する。同時にきょうだいが〈なぜ他の人と違うのか〉と疑問をもち始める。しかし両親が学齢期の同胞に対しきょうだいの能力や特性を正確に説明するのは極めて難しい。とりわけ障害児と同胞の年齢が近く、見た目に障害があるとわかりにくい場合など、両親もこの時期は、きょうだいの障害について正確に理解しているかどうか不確実であり、それゆえ、同胞へ曖昧でわかりにくい説明になってしまっている可能性がある。学齢期には小学校の同級生も障害児の違和感に気付いており、同胞への心ない言葉やいじめなどへと展開するなどの【ネガティブ体験】をする。それだけではなく、家庭においても親切心からの行動を両親に注意されるなど、きょうだいとの対応の差を不満に思うなど、家庭や学校以外の場面でもきょうだいの理解出来ない行動に面し【ネガティブ感情】を経験することとなる。その一方で、同胞は同級生や周囲からの心ない言葉や対応に対して同調することは無く、きょうだいも含んだグループで遊ぶという【ポジティブ体験】もあった。また、きょうだいの興味や能力を伸ばすために家族で様々なアクティビティに参加したが、それらが同胞にとっても楽しい出来事として記憶されていた。

３）思春期：これまでの項目に加えて【きょうだいの成長への気づき】【自己成長感】【コーピング】が抽出された。思春期においても【障害の告知】が無かった同胞は、きょうだいが支援学級や支援学校に通うことで、明確に【きょうだいの障害への気づき】があり、この時初めてきょうだいの障害名を知った同胞もいた。同時にきょうだいに対して、これまでの行動問題や障害によって隠れていた、きょうだいが本来持っていた能力や、発達に伴い伸びてきた能力などに触れ【きょうだいの成長への気づき】を得て、きょうだいの存在を改めて捉え直していた。また、これまでの友人関係から様々なネガティブな気づきを得ていた同胞は、中学生から高校生になる過程で自らが環境を選択することで、同胞同士や理解のある友人関係を築くなど、より本質的な人間関係構築の側面といえる【周囲への気づき】が示された。思春期になると同胞は、本を読み【きょうだいの障害への理解】を試みるようになる。さらに、生活の中できょうだいの得意・不得意を理解し、きょうだいの発達や成長に合わせた方法でコミュニケーションを取るなどの工夫を行っていた。きょうだいの成長も相まって家族や兄弟姉妹で共有できる体験や話題が増えることで、これまでに無かった様々な【ポジティブ体験】をするようになった。特に、きょうだいの成長やきょうだいを受け入れてくれた友人との関係の広がりは、同胞の喜びに繋がる【ポジティブ感情】をもたらしていた。

思春期の同胞は、ネガティブな側面もポジティブに捉えて解釈することは可能であるとの認識に至る、大きな【自己成長感】を感じられるようになっている。その理由には、様々なネガティブ体験やポジティブ体験を通して学習してきたことが挙げられる。幼児期から児童期において、同胞は周囲やきょうだいとの関わりにおいて戸惑う出来事に面した際、様々な試行錯誤を繰り返し対応している。これらが、例えば、高校進学などの進路や将来の生き方を見つめる岐路に立った時、問題解決を繰り返すなかで、柔軟な考え方が身につき、多くの同胞において自身やきょうだいにとってよりよい環境や関係を築く方向へと進む選択が出来るようになったと考えることができる。同胞自身は発達段階が進むに伴って次々と現れる、新たな課題や状況に対しても、積極的に挑戦し、意欲的に創意工夫ができるようになったといえる。このような試行錯誤や成功体験のなかで、同胞はより効果的なストレス【コーピング】を身につけることもわかった。こうした、自己成長感やコーピングは、自らが思春期という難しい発達段階にあったとき、自己の内面に振り回されることなく、より柔軟な選択が自己決定できるようになり、このことが困難とされる思春期を乗り切るリソースとして働いた可能性も考えられる。

４）青年期：これまでの項目に加えて【自身や家族への気づき】【自身や家族への理解】【障害理解】が抽出された。【自身や家族への気づき】において同胞は同胞自身の性格の一部にきょうだいの存在の影響を再認識し、以前よりも、きょうだいの障害についてより理解を深めることが出来るようになったという自身の変化が覗えた。そして、自身を成長させてくれたきょうだいに対する感謝の気持ちに気づくなどの発言や一層正義感が強く

なったことへの気づきなどが示された。また自身の家族の在り方や関係においても、これまでを顧みて他の家族とは異なるが自身やきょうだいにとって良い考え方や関係が築かれていることへの気づきも明らかになった。

【きょうだいへの気づき】として同胞は、障害を持っていることを含めて、きょうだいのありのままの存在が、様々なところで良い影響を及ぼしている可能性について触れ、同胞自身もきょうだいの発達のあり様は、他者とは異なるユニークなかたちで確実に成長しており、きょうだいの持つ能力についても、得意不得意の幅が大きいだけであると考えていることが明らかとなった。このことにより青年期において同胞は、きょうだい以外の障害児者に対しても、突出した個性だと捉えることができるようになり、少しの手助けで障害児者本人の力を引き出すことができるという【障害理解】に至っている。こうした考え方が身につくことは、きょうだいや障害者に対するだけではなく、同胞が人生を生きていく中での他者との関係性を築く上での大きなリソースとなり得ると考えられる。

その証拠に、これまでの発達段階と比較すると、青年期の【ネガティブ体験】の叙述は大きく減少し、それに伴う【ネガティブ感情】も相対的に少なくなった。これは、同胞がきょうだいの個性や障害の特性を理解し、お互いにとってよりよい対応の仕方を獲得したからだと考えることができる。同胞の思考の柔軟さが増し、自身が発達していく過程において様々な試行錯誤を積極的に試みてきた思春期を経て、同胞自身がアイデンティティの確立などに伴って情緒や考え方なども身につけてきたことが大きな要因であると思える。またきょうだい自身もゆっくりではあるが確実に成長を遂げており、自身で対処出来ることや安定した関わりが増えたことは、同胞のポジティブな関わりも大きい可能性が考えられる。こうした成長感が感じられる一方で、青年期の同胞からは、新たな不安が語られたことは特徴的であった。

青年期の同胞において特徴的な【ポジティブ体験】の多くは、同胞ときょうだいの２人だけでの外出である。これまでは両親や周囲の支援者などの力を借りて、互いに様々な思いを持って関わってきた兄弟姉妹であるが、互いに苦慮することなく、きょうだいと２人で旅行が出来るようになったことは同胞にとって、これまでの様々な出来事を子どもなりに試行錯誤をして対応してきた苦労が労われ、問題解決力がついてきたような出来事として捉えられる可能性がある。こうした一般的には普通であることも、同胞ときょうだいにとっては、さまざまなネガティブ経験を通ってきたうえでのポジティブ体験といえるため、特に、同胞にとっては、より大きな意味をもって心の成長を支えた可能性がある。また、学校などで友人が障害について興味を持ち、障害児者との接し方について友人からの相談を受けるなど、自身の経験が同じ悩みをもつ誰かの役に立つ体験をしている。

このように、青年期においては【自己成長感】は、これまでの発達段階の中で最も多く語られていた。これらの成長感は、価値観の変容、自己の安定感、他者との繋がり、他者への尊重を重視するなど、安定した人生を生きていくための成長感を得ていることが明らかとなった。きょうだいとの生活を通して障害や障害児者への考え方や自身の立場、周囲への価値観の変化はもちろんのこと、自分を大切にしながらも他者のために尽くしたいという思いや、精神的に強くなったという自己の心の安定性が獲得されたことは注目すべきことといえる。さらに、人として生きていくには障害の有無は関係無く、人は皆同じであり他者との繋がりを感じたことは、きょうだいのおかげで人への配慮や気遣いができるようになるなどの、他者尊重できるという自己成長感を得ていた。また自身やきょうだいについて振り返るなかで感謝の思いへの気づきもあるなど、共にネガティブな体験を乗り越えることは、一般的な兄弟姉妹よりも強い絆につながると考えることができる。

５）未来：現在青年期におかれている同胞が考えるきょうだいとの未来については、多くの同胞が【今と変わらない関係を望む】とし、将来も引き続き自身が【きょうだいへの支え】となりたいと考えが多かった。また、同胞自身の【将来の夢】としては、特別支援学校の教員や医療機関の方でカウンセラーとして働き、障害に対する偏見や差別を無くしたいとの思いも語られた。自身が障害のある子たちの中で育ってきた経験は、支援学校の教員になることで生きてくると思うと語った。これらは障害児を兄弟姉妹に持った同胞ならではの意思決定といえる。

上述したように、未来への展望を持つ一方、同胞は【将来への不安】も抱えていることが明らかになった。現在の家族のこれからについて、今後の同胞自身のライフイベントやきょうだいのライフイベントでの不安や、親無き後の障害児者の未来への不安、現在の障害児者との関係性への思いなどが現実として語られた。これは青年期以降、人間関係が会社の人やプライベートを気軽に話せる関係とは異なり、同胞同士などの繋がりが希薄になってくることを見越しての不安もあるのではないか。親無き後や自身の家族を持ってからも当事者同士の繋がりは、同胞の不安を和らげる上でとても重要になってくると考える。

青年期まで発達を経た同胞の経験をPTGの視点から振り返ってみると、PTGの場合は、その背景となったきっかけとしての出来事は、自然災害や死別、あるいは悲惨な事件や出来事などの、一般に急性で衝撃度の高い体験を基に考えられた概念である。これは同胞の場合、きょうだいに障害があることは当然のこととして幼少期より生活の中での日常的な出来事として定着しており、むしろ、成長とともに周囲の対応などによって、障害のスティグマ的な意味に徐々に気づき始め

ることといえる。そのため特に、学齢期の後半から思春期にかけて情緒が不安定になりがちな場面において、とりわけ、周囲の対応が重要な意味を持ってくると考えられる。

このように考えると、PTG研究のきっかけとなる出来事は衝撃的な出来事である一方、同胞が感じるストレスは発達を経て徐々にインパクトが重くなっていくような質的に異なる出来事といえるが、その結果として得られる成長感やレジリエンスは共通のものがあると考えることができる。

考　察

１．同胞の成長過程における心理的変容

障害児者と生活を共にする同胞が自身の成長過程において、きょうだいや家族、学校や地域といった取り巻く特徴的な環境変化と、それに伴う同胞自身の心理的な変容の経過を図に示した（図２）。その結果、きょうだいとの生活を通して現在、青年期にある同胞は「受容力」「共感力」「人間観」「（障害）対人スキル」「挑戦性」の５つの力を獲得していると考えることができる。

幼少期・学齢期の多くの同胞は、きょうだいの障害の有無などは理解出来ないまま、きょうだいがきっかけで出会えた友人や仲間の存在から様々な影響を受け、ネガティブにもポジティブにも大きく気持ちが揺れるアンビバレントな過程を経る。これは、思いを上手く言語化できない発達期にある同胞おいて大きなストレッサーであり、我慢することで対応していたと考えられる。このような同胞の我慢は両親や教員などの周囲の大人には気付かれず、そのため適切な支援を受けることのない放置状態にあることが多かった。このことは、きょうだいの障害特有の能力や特性を同胞へ正確に告知する難しさ、同胞への支援が適切ではない可能性が障害児をもつ家族が抱える問題であると言える。

思春期に入ると同胞は、反抗期という自身にとっても困難な課題を抱えながらきょうだいへの様々な葛藤や、いじめへの無力感、障害について理解の無い人への失望などに面する。しかしながら、そうした人生のあり様が理解できていく上で、自ら環境や友人関係を選択し、より本質的な人としての関わりが構築されていく。きょうだい自身は、ゆっくりではあるが成長しており、その変化に気づいていくことが、家族や同胞にとって大きな喜びとなることが分かった。また、同胞なりのきょうだい理解や障害理解が進んでいくに従い親との障害観の違いが明らかになってくる。さらに、進路選択においても、きょうだいの存在が影響している同胞が多いことも明らかとなった。

青年期に至る現在まで、障害児者の兄弟姉妹として心理的な変容を経験してきた同胞の多くは、「受容力」「共感力」「人間観」「（障害）対人スキル」「挑戦性」などの５つの力を獲得してきたと言える。また同胞の発達に伴い家族の関係性や絆が深まっていた。「受容力」とは同胞にとって〈障害は個性である〉など障害のみならず、その人そのものをそのまま受け入れる力のことである。「共感力」とは、人に共感を示せる力であり、同胞は〈自分を大切にしながらも他人の為に尽くすようになった〉〈初対面の障害を持っている子に親近感があり、抵抗がなく接することができる〉などの共感の

同胞の発達に従って家族が深まる

発達段階	出来事	ポジティブ感情	ネガティブ感情
幼少期	・支援者達との出会い/イベント ・理解しがたいトラブル	・トラブルはあるが楽しい思い出	・違和感 ・寂しさ ・戸惑い
学齢期	・いじめ ・良い子の制約 ↓ 気づき	・きょうだいの友達との交流 （障害の有無に関わらず） ・家族との活動	・怒り ・理不尽さ ・疑問 ストレス(我慢)
思春期	・親との障害観の違い ・告知/自分で調べる→理解・受容 ・同胞同士の絆 ・きょうだいの成長の発見	・きょうだいの成長を喜ぶ	・反抗期に伴うきょうだいに対する感情 ・いじめへの無力感 ストレス(無力・人への失望)
青年期(現在)	・2人で共有出来る活動 ・障害へのポジティブな価値の発見 ・思考の柔軟性/コーピングの多様性の獲得	・きょうだいへの感謝 （きょうだいと共に成長を喜ぶ きょうだいとの連帯感） ・マインドフル （新しい可能性の気づき 心の余裕）	・将来への迷い

↓

受容力・共感力・人間観
(障害)対応スキル・挑戦性

図２　同胞の成長過程における心理的変容

幅が広まっていることから考えられる。「人間観」とは、人間とはこういう存在であるという考えで〈誰しも何かしらの障害を持っていると思う〉〈障害の有無に関わらず困っている人がいたら助けるべきだと思う〉などの語りから同胞の多くが人間観の確立が成されているように考える。「（障害）対人スキル」とは、人と関係を築くスキルのことを指し、同胞は〈人の気持ちをくみ取ろうとする〉〈障害のある子には表情や仕草など非言語の側面から、その子の思いを汲み取ることができるようになり、私にとって大きな成長である〉などの対人スキルを獲得していることが明らかとなった。「挑戦性」とは、新たなことへの挑戦のことである。これについて同胞は〈新しいことには、とにかくやってみようという気持ちで取り組む〉〈どんなことでも自分の経験になるので、やってみてできるかできないか考えようと思う〉と語っている。これまで障害児との生活において様々な試行錯誤を繰り返し、成功体験を積み重ねてきた結果であることが示唆される。

２．今後の課題

本研究では、発達段階ごとにその時期の同胞に生じるネガティブ体験やポジティブ体験とそれらをどのように感じながら成長を経ていくのかについて変化を明らかにすることができた。しかし今回の対象者（同胞）のきょうだいが持つ障害の多くが発達障害や知的障害であり、障害の種類に偏りがあったと考える。これは障害種別が身体障害者・後天的に障害を負った方を兄弟姉妹に持つ同胞とは異なるプロセスを辿ると考える。加えて対象者と障害児者の出生順位、年齢差、男女差などにおいて、同胞の経験する出来事やその心理的変容のプロセスにおいても大きく異なると考える。しかし今回の研究では対象者が少なく、Maters（1990）[15]の指摘に、同胞や障害児者の特徴、家庭環境などの厳密な統制は不可能に近いとあるように本研究においてもこれらを達成することが出来なかった。これらの変数を馴らして研究することが今後の課題として挙げられる。

加えて本研究では、同胞が過去に起った出来事や感情を想起しながら成長過程に見られる変化を明らかにしたが、より具体的な心理的変容のプロセスを明らかにするには、同胞に対して各発達段階を縦断的に研究することが求められると考える。縦断的な研究を進めることで、同胞がそのときその場で経験し感じていることのプロセスを見ることが出来ると考えられる。

引用文献

１）Breslau N, Weitzmen. M, & Messenger K. Psychologic function of siblings of disabled children. Pediatrics. 1981;67:344-353
2）小西行朗，高田哲，杉本健郎（編），広川津子．「家族の静かな叫びを聞こう“医療的ケアネットワーク”」 かもがわ出版．2021，132-141
3）Tew B & Laurence K. M. Mothers, Brothers and Sisters of Patients with Spina Bifida. Developmental Medicine and Child Neurology. 1973;15 Supp:29
4）立山清美，立山順一，宮前珠子．「障害児のきょうだいの成長過程に見られる気になる兆候」その原因と母親の「きょうだい」への配慮　広島大学保健学ジャーナル．2003;3:37-45
5）平川忠敏．障害児の同胞　幼年教育研究報．1986;11:65-72
6）Meyer D. J., Vadasy P. F. Sibshops: Workshops for siblings of children with special needs. Rev. ed, Paul H Brookes Pub. 1994,
7）川上あずさ．自閉症スペクトラム障害のある児ときょうだいの関係構築　日本小児科看護学会誌．2013;2:34-40
8）八田純子，鈴置央．PTG（外傷後成長）と楽観性に関する一考察　愛知学院大学心身科学部紀要．2015;11:44-56
9）Richard G. Tedeschi and Lawrence G. Calhoun. Posttraumatic Growth: Conceptual Foundations and Empirical Evidence. Psychological Inquiry. 2004;15(1):1-18
10）Richard G. Tedeschi and Lawrence G. Calhoun. The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the Positive Legacy of Trauma. Journal of Traumatic Stress. 1996;9(3):455-471
11）Taku K, Calhoun L. G., Tedeschi R. G., Gil-Rivas V., Kilmer R. P.& Cann A. Examining posttraumatic growth among Japanese university students. Anxiety, Stress, & Coping. 2007;20:353-367
12）近藤綾音，堤俊彦，水谷ナナミ．同胞の存在がきょうだいへ与えるポジティブな影響－レジリエンス・PTGIに着目して－　日本発達心理学会第28回大会論集．2018，619
13）三原博光．精神遅滞児のいる兄弟姉妹のパーソナリティの成長について－M.ザイフェルトの「Geschwister in Familie mit geistig behinderten Kindern」の著書を参考に－　川崎医療福祉学会誌．1993;3(2):29-34
14）田中博晃．KJ法クイックマニュアル　外国語研究メディア学会（LET）関西支部 メソドロジー研究部会2012年度報告論集．2012;102-106
15）Mates T.F. Siblings of autistic children: Their adjustment and performance at home and in school. Journal of Autism and Developmental Disorders. 1990; 20:545-553

Psychological Transformation in the Growth Process on Siblings of Handicapped Children and Persons
－ Analysis Through Positive Transformation －

Ayane KONDO, MA,*　Toshihiko TSUTSUMI, CPP, EdD**

Objectives : In this study, we interviewed normal persons（referred to as "siblings"）who have sisters and/or brothers with disabilities in order to find positive psychological changes they have experienced looking back on their lives and what prospects they have for the future.

Methods : To clarify this process step by step,siblings' developmental experiences were classified into five stages: childhood（0-5 years old）, school age（6-12 years old）, adolescence（13-18 years old）, adulthood（19 years old-present）, and the future.

Results : Siblings had experienced negative feelings of discomfort, such as bewilderment, anger, and so on, with their sister's or brother's disabilities and the people around them during childhood through adolescence.

Conclusions : From adolescence to adulthood, siblings experienced a change inappreciation for brothers and sisters with disabilities. Also, it was found that as their family ties grow stronger, many siblings have gained a sense of self-growth, including "acceptance", "empathy", "view of humanity", "skills to deal with（disabilities）", and "challenge" as the siblings develop.

Key Words : Siblings of handicapped children & persons , Growing process, Personal growth, Resilience, PTG（Post Traumatic Growth）

（Received in Oct 14, 2022, Accepted in Dec 20, 2022）

* Department of Human Sciences The Graduate School of Osaka University of Human Sciences.
** Department of Psychology, Faculty of Psychology, Osaka University of Human Sciences.
** Corresponding author：Department of Psychology, Faculty of Psychology, Osaka University of Human Sciences. 1-4-1, Shojaku, Settsu, Osaka 566-8501, Japan.
E-mail：t-tsutsumi@kun.ohs.ac.jp